

五十九年の誤り (二)

土田龍太郎

莊子にまれ淮南子にまれ、ともにいはゆる道家者流の典籍と見なしつべし。されば右に列ねし甲乙丙いづれも寓喩めきて、なにとやらむまことしからぬけさへそひたり。蘧伯玉きはくきよくのいまはのきはまことはいかがなりけむ、今知らむとするもはかばかしきたよりとてなれば、おぼつかなきままにやみなむほかすべなし。

莊子には郭象のものせるなる註あれど、これおほかたは向秀の筆になりしこと世説新語によりて知るをうべし。郭註にはまた成玄英の疏あり。淮南子には許慎もしは高誘の施せし註今に遺りたり。甲乙丙の文意あき明めむとせば、かかる註疏のたぐひ、さらに後の世の物知り人のくさぐさの論あげひつぶさにけみせであるべからざるはさることなれども、それはまりにくさぐさの論ひつぶさにけみせであるべからざるはさることなれども、それは右の甲乙丙につきておのづからわが心にきざせるなにくれのことどもついでもなくただおしあてに記し列ねむほかせむかたなきにたり。

先達にとりてはこよなく難きこと後進のかへりていとまたやすくなしとぐる例世ためしに少からず。かかる例の多きにまかせて蘧伯玉のことを述ぶる丙の説きさまひとわたりはさかしげに聞ゆれどもつひにはただなほざりの戒めにすぎねば、これのみにて賢大夫の心の奥にただに至らむこと望むべくもあらず。

されば丙はさしおきて、今はむねと甲と乙を比べ見ばおほかたはことたりぬべからむ。甲は孔子と關ることなく、乙にはかへりて蘧伯玉の名見え。もはら孔子につきて記したり。甲と乙にかかる違たがひめこそあれ、措辭に行文あひ重なれるところ少なからず、なべての旨趣さしも距らずといひて誤りなきにたり。

甲にて未嘗不始於是之而卒誦之以非也と云へるところ、いともむつかしげにてなだらかならず、文意とみには捉へがたし。同じおもむきを乙にては、たやすく釋き知らしめむとにやありけむ、始時所是卒而非之とこと短かに言ひかへたり。

甲の文にさながら倣ひつつ、かつはその趣意を悟りやすからしめむとて、かつは蘧伯玉のことを孔子のことに説き攻めむとほりして、甲のここかしこの文字に改変を施せしものかつてありけめども、乙はかかるものの筆になれりと推し測りておほかた違はざるがごとし。

かく考へもてゆかば、甲は乙に先立ち、乙は甲に後れ甲に據りてなれりといはではあるべからず。これをもて乙は甲の註脚なりといはばさすがこと過ぎたらめ、要略のたぐひなりと見ばさしてはばかりあるまじくなむおぼゆる。

(令和三年九月十九日受附)